生活景と都市づくりの詩
－山形における文翔館都市景観保全問題をめぐって－

A Report on Historic Preservation and Aesthetic Control through Civic Action
－ The Case of the Bunsyoukan District in Yamagata City －

高野　公男
TAKANO Kimio

Bunsyoukan, located in the center of Yamagata City, is a building symbolic of the history of Yamagata. Recently, a plan was presented for 14-story apartment building behind the Bunsyoukan. When the news was announced, a citizens' movement for preservation of the historical district formed, and a way to preserve the character of the district was discussed. As a result, the height of the building was scale downed to 10 stories, and the historic character of the district was preserved. The purpose of this report is to review the process and the details of these civic activities, and to examine the preservation and aesthetic control of the urban environment in the future.

1．はじめに

近年、わが国では全国各地で意欲的な景観づくりがすすめられるようになってきた。山形でもこの10年の間、景観や環境に対する関心が高まっている。行政計画でも景観を重視した取組が多くみられるようになっているし、講演会やシンポジウム、研究集会で景観をテーマに取り上げると人はよく集まる。その理由として、景観が県の総合計画に大きく位置づけられたこと、各種取組の成果が徐々に日の目を見るようになっていること、そして何よりも、一定の経済的なゆとりを得て、県民の目が身近な環境や生活の質の向上に向けられてきたことなどが挙げられよう。

しかし、通常の景観論議では、自然景観や美しい町並み景観、公共施設のデザインなど、いわゆる絵はがき的な顔づくり景観が取り上げられることが多く、生活に立脚した風景について論じられる機会はまだ少ない。景観計画の本来の意義が、生活の質、都市空間の質を高めることにあるとすれば、生活風景からの環境づくりこそ、今後求められる地域づくりの重要な視点と考えられる。

地域景観は時間の中で地域社会が創り出すものである。その長いプロセスには、時代の気分、地域固有の感性といったものが大きく働いている。都市は一種の生命体といえる。生物学に生命誌があるように、都市計画にも都市誌、都市計画誌という視点があってよいと思う。そこでここでは、都市のあり方を思い、都市の実像を創り出

す人々の営みの総体を「都市づくりの詩」として位置づけてみたい。本稿では、山形で最近話題となった文翔館・都市景観保全問題とその取組の顛末をレビューし、今後の参考としたい。

2．景観保全地区と高層マンション計画

平成11年11月18日付けの山形新聞社会面に次のような記事が大きく報じられた。＜文翔館の背後に14階建てのマンション～地区民、高さの抑制要望～＞、…「景観を損ねるよ」というキャプションで報じられたこの記事は、景観保全のあり方をめぐって小さな波紋を呼び起こした。筆者が所属する大学の教員たちにも一般市民、行政職員、建築家、識者から保全を求める声や景観問題の取組方策についての意見が寄せられた。県会議員からもていねいな封書入りの意見聴取の文書が届いた。県議会や市議会でも熱心に論議されていたようである。山形が景観保全問題でこのようにフィーバーすることは大変珍しいことであった。

文翔館は山形県が誇る歴史的建造物、国の重要文化財である。その前身は旧山形県庁で、米沢出身の建築家・中条精一郎と田原真之介が設計し、壮麗なルネッサンス様式を実現したものである。この旧県庁（本庁舎と県会議事堂）を1992年、山形県が巨費を投じて保存・修復した。明治の貴婦人というべき秀麗な容姿を持つ建物は、文化・交流施設として市民に開放され、現在、県史資料展示場、展覧会、コンサート、市民集会等に使われている。

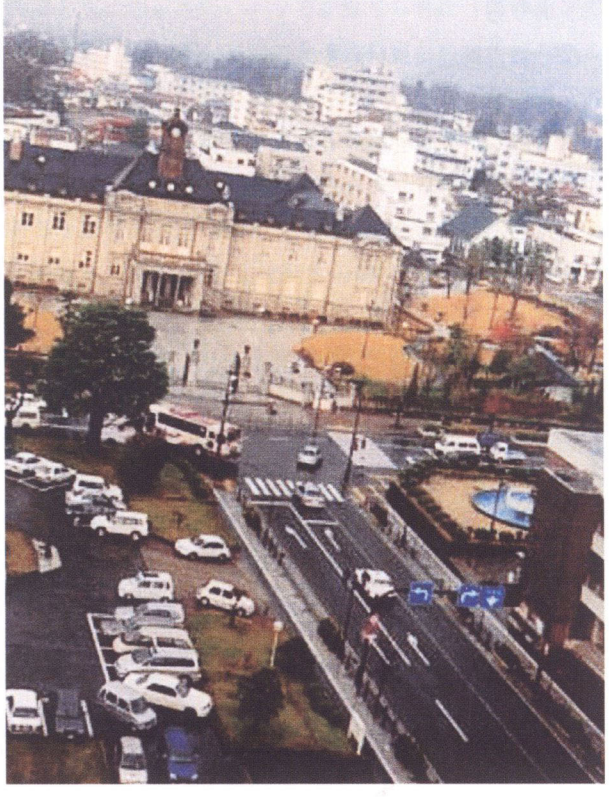

写真１　文翔館と周辺市街地

文翔館は大変おしゃれな公共施設である。ことに本館に付属する旧議場は100～200人程度の集会やパーティを行うには手頃なスペースで、東京・迎賓館などの多くの歴史的建造物に見られる華美な装飾が少なく、アールデコの影響も受けたと思われるその瀟洒な室内空間は、全く威圧感を感じないくつろげる空間となっている。講演会や会議はもちろん、ミニコンサートや芸事のおさらい、子女達の発表会、出版記念会や受賞祝賀会などの行事を行うには最適なスケールで、庭園や周辺環境も含めて文化的ステータスを享受できる都市空間である。

筆者の趣向からすると、今春、開催された山形民謡をジャズで歌うコンサート「井上ひさしの民謡を遊ぼう～山形文化フォーラム」が、大変印象的だった。残念ながら会場に行けず、電波（NHK衛星放送・平成12年２月19日）を通して鑑賞したのだが、島田歌穂（ジャズシンガー）、島健（ピアニスト）によるパフォーマンスが文翔館の空間にマッチし、しみじみとした味わいが伝わってきてとてもよかった。全国にも類似施設があるのだろうが、文翔館は掛け値なしに保存活用の第一級品といえるだろう。

文翔館のもう一つの値打ちは、文翔館を含む周辺の都市デザインである。近世城下町としての山形は、南北朝以来の東北の雄藩・最上氏の居城であり、1590年代に最上義光により拡充整備された。明治になり、県令・三島通庸による「文明開化の都市計画」、「秀麗な官庁街のデザイン」として知られる都市改造が行われ、現在の七日町商店街周辺を中心に、市街地整備が進められた。文翔館はその中心市街地の軸線上に位置し、アイストップとなるその正面からの景観は、わが国の都市デザイン史において、また現存する歴史的都市景観としても高い評価が与えられるものである。

話をもとに戻すと、まさに県民のシンボルとなるこの建物の背後に、大手ディベロッパーによる14階建て高さ47メートルの高層マンション建設計画が進められ、提出されていた建築確認申請書は、近日中に確認済み書がでる見込みとなっていたのである。

山形市は平成8年に景観条例、平成11年6月からは「大規模建築物届出制度」を制定しているが、しかしいずれも罰則規定がなく「業者に対して協力を求める」内容になっている。このため、高さなどの形態に関わる「指導」には自ずから限界があった。一方、地元の六日町地区は、市の景観形成計画の重点整備候補地区に位置づけられたことをきっかけに、平成8年に町内会が中心になり「文翔館周辺整備連絡協議会」を発足させ、町の景観づくりを始めていた。

しかし、建築協定や地区計画の整備までには至らず、その協議途中で“事件”が発生したのである。建築計画を知った近隣住民は9月に、同協議会や地区町会などの連名で、高さを30メートル以下に変更し、周辺環境との調和を図ること…などの要望書をディベロッパーに提出し、行政にも陳情している。しかし開発サイドは「合法的な建築計画であること、市の指導や住民の意見により外壁の色などにも配慮していること、文翔館周辺には中高層の建物がいくつもあり、今回のマンションだけが景観を阻害するといわれるのははなはだ残念」とし、今後も関係機関や住民との協議を続けていくことには同意するものの、高さを下げることについては難色を示し、住民とディベロッパー間での対立状態が続いていたのである。

多くの市民が文翔館景観問題を知ったのは、この新聞報道からだった。この建物が建った場合、文翔館を正面から見ると、その横に“にょっきり”と顔をのぞかせることになる。ほかの場所ならいざ知らず、シンボルゾーンの一番見栄えのいい場所から異質な景観が出現し、景観の品格が損なわれることに異議を申し立てる市民が続出したのである。

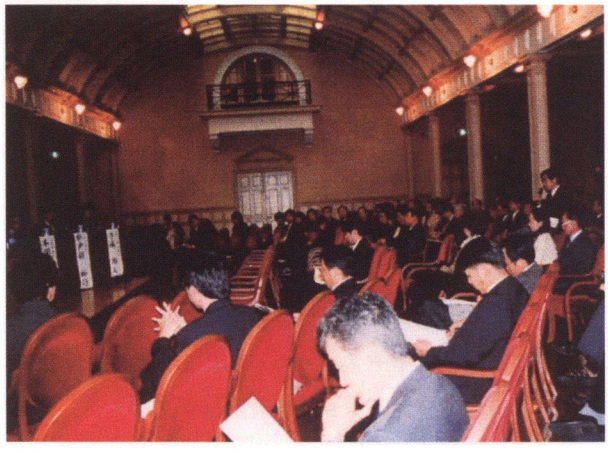

写真2　シンポジウム会場風景（文翔館・旧議事堂）

3．都市景観シンポジウム

中高層建築の建設計画に伴う景観問題は、いつも火急を要する問題である。はじめ、「地の声」としてあちこちで市民運動が立ち上がることを期待した。しかし、都心に高い物が建ってもいいではないか、“にょっきり”景観も気にならないなどの意見を持つ市民や専門家もおり、短期間に意見が集約され、実りある終結を迎えることは困難と思われた。そこで問題意識を持つ地元の建築家（JIA）やデザイナー、大学教員等の有志で対応しようということになり、景観問題を考えるシンポジウムを急遽企画した。

この、文翔館の都市景観問題は様々な側面の問題を内在させている。文翔館景観問題を契機に、幅広く都市の景観問題を論じようということになって、新聞報道のあった日から20日後の12月7日、「山形県の都市景観シンポジウム～歴史的環境と都心居住のあり方を考える」（主催：東北芸術工科大学景観研究会）という標題でシンポジウムを実施した。論点として以下の3つを設定した。

①歴史的地区などシンボルゾーンにおける景観形成のあり方

②一般市街地における中高層建築のデザインと景観形成のあり方

③これからの都心居住と住環境整備のあり方

雪の本降りの日であった。参加者数が心配された。雪がしんしんと降るなか、会場の文翔館・旧県会議場のホールに約150人の市民・関係者が集まった。

4．「図の景観」と都市文化の生活景

山形は美しい盆地都市である。しかし、必ずしも鍋底型の盆地都市ではなく、蔵王連山の扇状地に発達した山麓都市というべき都市である。山なみが美しく、都心のすぐ背後には里山や多様な自然が連担している。また、縄文以来と言われる端山信仰や出羽三山信仰など山に対する精神文化も色濃く残っている。このため、都心の景観を論じていても、いつの間にか自然景観の方に話題が移るほど山や自然は身近な存在となっている。山形の基層文化、人々の環境観の深層には山が存在しているようである。すなわち、山形県民の心象風景には、いつも山

の図像があり、そしてそのために、山と自然さえ豊かであれば都心はそこそこでよいというトレードオフの関係が心理として働いているのではないかとさえ思う。

文翔館に対する思いにも格別なものが見られた。それはおそらく以前から存在したものではなく、旧県庁舎が再生されたことにより、最近生まれたものではないかと推察される。一時は旧県庁を取り壊す話もあったと聞く。しかし、地元経済人など有識者による保存運動が起こり、8年前に保存修復された。そして、「県民への開放」という「見る景観」としてだけでなく「使う景観」としての付加価値も与えられた。その結果、再生されたその珠玉のような空間は、都市空間や都市生活に新しい意味と役割を与え、郷土文化に対する自負と自信をよみがえらせた。文翔館は開館以来、山形の都市文化の象徴として多大なインパクトを市民、県民に与え続けている。この文翔館再生事業は、都市に新たな「図の景観」をつくりだし、併せて文化ステータスの高い新しい「生活景」も定着させたといえるだろう。

シンポジウムでは、やはりマンションの高さの問題が話題の中心となった。行政、地元大手の建築事務所、大学それぞれが作成したモンタージュ・シュミレーション映像を基に周辺景観のあり方が論じられた。「県のシンボルであり、気品ある文翔館の後ろにおしめを干したバルコニーが見えるのは如何なものか。景観を保全するためには10階程度にの高さにすべきである」という意見が大勢を占めた。また、景観政策の立ち後れに対する行政批判もみられた。

外部資本のディベロッパーにとって、この「騒動」は青天の霹靂だったかも知れない。とにかく建てる場所が

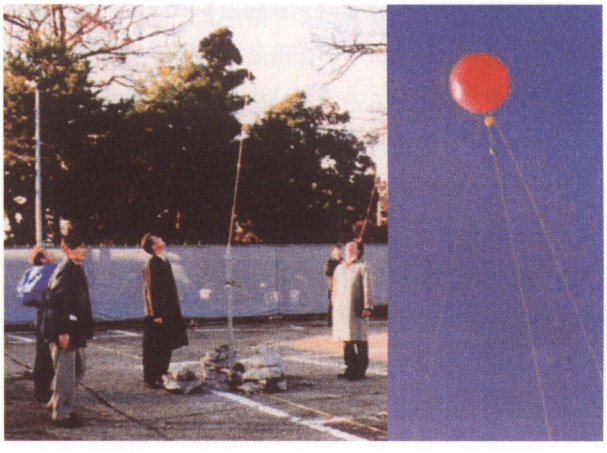

写真3　建設計画敷地でアドバルーンを揚げる関係者

悪かった。市の建築確認行政担当者も歯がゆい思いをしたに違いない。しかるべき文翔館周辺の景観計画が整備されてさえいれば、このように問題が紛糾することはなかったであろう。しかしそれは結果論である。多くの景観問題がそうであるように、「事件」が起こってからでないと問題構造も見えないし、人々の気持ちも動かない。シンポジウム企画サイドでは、所定の手続きを終えた建築計画の変更は困難であっても、場所性や景観のあり方、まちづくりのあり方を論議し、今後に向けて世論形成が出来れば大きな成果であると考えた。「負け戦はしたくないが、火中の栗は拾わねばならない」そんな気分が漂っていた。

しかし、不確かではあるがある種の期待感はあった。それは、今回ケースにおいては、企業の論理や行政事務の慣例を越えて、不利益を排除する地域の論理、市民の力が働くのではないかという予感であった。事実、このシンポジウムのあと、行政や地権者、経済界、デベロッパー間でいろいろな動きがあったようである。県都市計画課など関係者によるアドバルーンを揚げてマンションがどの位置からどのように見えるかの検証も行われている。そして、約一カ月後、当該ディベロッパーは建築計画を10階建てに変更することを発表し、“にょっきり”景観の出現は結果的に阻止された。地域社会の一時力が働き、「地の声」が「天の声」に届いたのである。

この景観騒動で、手柄を立てたのは一体誰だったのであろうか。とりあえず、地元住民、保全運動に関わった陰の有識者、行政職員、議員、知事や市長、また採算計画を修正して決断したディベロッパーなどを挙げることが出来る。しかし、それらの人々の心を駆り立てた源泉を考えれば、文翔館そのものの力、その文化的な力が大きく働いていたのではないかと思う。旧県庁の保存が、単なる資料館的な保存、化石的な保存であったとすれば、あれほどフィーバーすることはなかったに違いない。文翔館が単なる美観保存ではなく、その美しい内部空間が再現され、市民に開放・利用され、そのことを通して誇りと愛着が育まれていたからこそ、危機に際して支持を得たのではないかと思う。手柄を立てたのは文翔館そのもの存在であり、またその活用保存を決断し、新しい環境価値と生活景を創り出した地域社会そのものにあったといって過言ではないだろう。

5.「地の景観」と都心居住の生活景

もう一つの論点として掲げた「都心居住」や「住民参加によるまちづくり」の問題は、主催者が期待したほど議論を深めるまでに至らなかった。講師として急遽東京から招いた谷中学校・手嶋尚人氏の基調講演「マンション計画を契機とした谷中のまちづくり」は参加者に大きな感銘を与えたものの、会場からは必ずしも今後につながる十分な手応えや手がかりはつかめなかった。やはり、参加者にとって文翔館の景観問題が最大の関心事だったのである。

そもそも、このような景観問題が発生する背景には、高層マンション建設計画という社会動向がある。山形市（市域人口25万人、圏域人口58万人）では、最近、旧市街地内でのマンション建設が盛んである。10～11階程度の高層マンションがあちこちに建設されている。需要の中身はともかく、都心型の生活を指向する居住層が多く存在しているということなのだ。

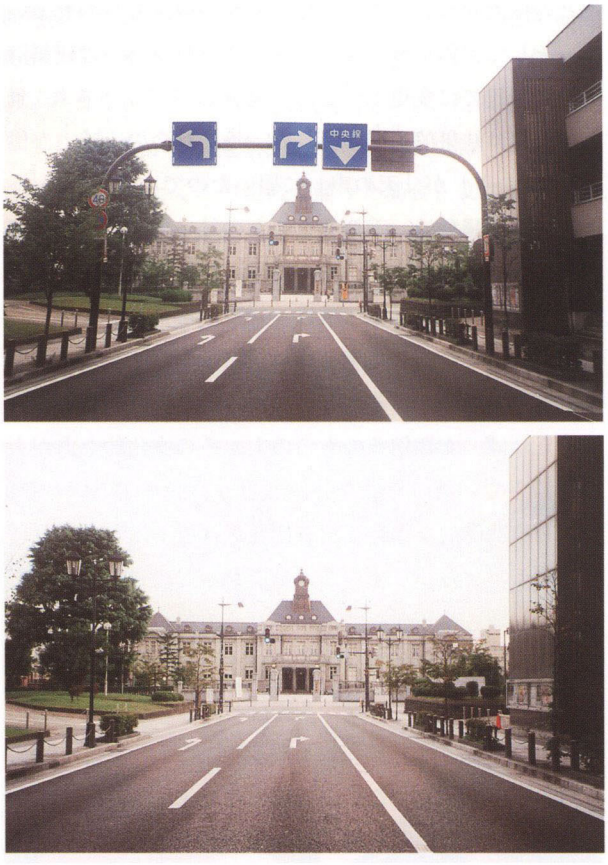

写真４　門型の交通標識・整備前（上）と撤去・整備後の景観（下）

都市の郊外化、都心の空洞化が都市問題として取り上げられ、コンパクトシティ、都心機能の凝縮化が標榜される中で、住宅需要の存在は都心再生につながるシナリオの一つであり、都心地区の住宅建設は、都心への人口回帰という点で歓迎すべき現象である。限られた盆地空間の中で都市がバランスよく成長していくためには、都市空間が節操なく横に広がるよりも、秩序を保って縦に伸びる選択の方が理にかなうのだ。

しかし、望ましい都市の市街地像、生活像がはっきりしないまま、また都市空間の質が保障されないままに立体化が進むことによって、乱雑な都市が形成されていくことへの懸念もある。どのような人々が都心に住むのか。どのような生活を望んでいるのか。都市住宅の形態や住環境はどうあるべきなのか。シンポジウムではもう少し都心住宅や都心居住のあり方について議論をする必要があった。

農地や自然を蚕食しつつ進行する住宅の均質的な郊外化に対して、「都心の住宅はもっと立体化すべきである」という意見も若手建築家の間で台頭してきている。しかし、急いで結論を出すのはよそう。次のステージとして、郊外、都心を含めて、都市に住む生活像をどう探求していくかが、これからの都市づくりの課題となるのだ。

6．景観整備の展開

文翔館景観問題を契機に、新しいまちづくりの芽も生まれている。平成12年５月11日、文翔館街区の住民・地権者は、調和あるまちなみの形成をめざし、高さ、形態、色彩、屋外広告物等の景観形成基準ならびに自主管理規定を含む「文翔館周辺まちづくり協定」を締結した。これからは、都心での住み方や住環境のあり方に対する模索や提案も生まれてくるだろう。何故なら、豊かな生活風景を創り出す主人公は、なんといってもそこに住む住民自身によるものなのだから。

山形県土木部では、この文翔館都市景観問題をきっかけに、同年12月より文翔館がより美しく見えるための周辺環境整備の検討をすすめた。現在、七日町通りからアイストップとなる文翔館方面を見ると、三基の道路標識と案内標識が道路上（県道山形山寺線）に門型に掲げられ、文翔館の景観を遮っている。これらの景観阻害要因は都市景観シンポジウムでも指摘されている。そこで、

県土木部は、県警察本部と交通安全面で支障がなく、かつ景観に配慮した道路標識の整備を協議し、その結果、これらの標識二基を撤去することで一致した。標識がなくなると山形市役所前から文翔館を見た場合、遮るものがなくなり建物が一層美しく見える。景観を優先して道路標識を移す計画は県内では初めての試みとなった(2000年9月整備完了・写真4)。「都市づくりの詩」は更に波紋を広げている。

*

21世紀は都市の時代になるといわれている。人々の生活が都市型に移行するにともなって、都市生活や都市空間の質の向上を求める住民指向も年々高まっている。これからの都市計画の役割の一つとして、住民の学習と実践の手がかりとなる様々な情報や機会を提供し、住民の意識やまちづくりダイナミズムを助長していくことが一層重要になるのではないだろうか。都市づくりは地域の文化であり響きあう都市の詩である。都市の文化的な力を総合的に涵養し、市民自らが物語を謳いあげていくことの出来る都市づくりをめざしたい。「生活景からの地域環境づくり」はその出発点となるものであり、これからの時代の都市づくり、地域づくりの方法論として、その可能性を追求していく必要がある。

7. あとがき

本稿は、2000年度日本建築学会大会(東北)において開催された都市計画部門・農村計画部門研究協議会「まちづくりのシナリオメイキング－生活景からの地域環境づくり」の協議資料として寄稿した論文を加筆したものである。山形県では景観施策やまちづくりに関する様々な側面からの取り組みがなされているが、そのプロセスを記録・レビューし、その情報を広く行政・市民の共有財産としていくことが重要と思われる。本稿は、標題の都市景観保存問題に関わった一人として、私見も交えてその経緯を報告したものである。この報告が、今後の地域づくりに資することになれば幸いである。なお、本稿をまとめるにあたり山形県都市計画課・熊坂俊秀、小林雅史両氏より資料の提供をいただいた。

注　　記

1) シンポジウムプログラム

■タイトル:『山形県の都市景観を考えるシンポジウム～歴史的環境と都心居住のあり方を考える～』 日時:平成11年12月7日(火)13:00～17:00　場所:文翔館大会議室　主催:東北芸術工科大学景観研究会　協賛:山形県都市計画協会　(社)山形県建築士会　(社)JIA山形、東北芸術工科大学　協力:山形の景観を考える市民の会

■プログラム:1.趣旨説明:高野公男(東北芸術工科大学教授) 2.基調講演:手嶋尚人(建築家・谷中学校代表・千葉大学非常勤講師)「マンション計画を契機とした谷中のまちづくり」 3.シンポジウム「調和のとれた町並み景観をどう創りだしていくか」 ○報告:景観行政の取り組み等(山形県ほか) ○意見発表/相羽康郎(東北芸術工科大学教授):「文翔館周辺の都市景観形成とまちづくりの手法」 鈴木千代(山形の景観を考える市民の会):「壊れゆく山形の町並み景観の問題点」 水戸部祐行(建築家・JIA山形):「住まう環境としての都心形成のあり方」 本間利雄(文翔館友の会会長):「かくありたい山形の地域景観と文翔館の関係」 ○討論/コーディネーター:高野公男　コメンテーター:手嶋尚人 司会:日原もとこ(東北芸術工科大学教授) 松田忠一(建築家・JIA山形)

参考文献

1) 佐藤滋『城下町の近代都市づくり』鹿島出版会、1995年
2)『山形県の都市景観を考えるシンポジウム講演記録』東北芸術工科大学景観研究会2000年2月
3)『山形市都市景観計画策定基礎調査報告書Ⅰ～Ⅲ』山形市・東北芸術工科大学、1994年3月
4)「文翔館の背後に14階建てのマンション/景観を損ねるよ/地区住民、高さの抑制要望」山形新聞1999年11月18日朝刊
5)「視界すっきり文翔館/道路標識と案内板・撤去し路肩へ/景観優先、初の試み」山形新聞2000年7月19日朝刊